

教育資料室だより

No.28 令和7年(2025).7.1

発行 桐生市立教育資料室

桐生市小曾根町3-30(桐生市教育センター内)

電話 0277(46)6191

桐生の人物くその4

後 桐生氏

「桐生市史」や「桐生の歴史」の
によれば、桐生に
は資料室だより

第3号で取り上げた、桐生六郎とは別系統の「桐生」を名乗った武士団がいたとされます。梅田町一丁目の「西方寺」はその菩提寺であり、累代の墓があります。「桐生」と呼ばれてはいますが、近年の研究で、もとは藤原秀郷を祖とする藤姓足利氏の庶流である「佐野一族」の一統と解釈されるようになっていきます。西方寺本尊(阿弥陀如来)の胎内に遺された銘文に、後述する九代桐生大炊助祐綱について「佐野大炊助助綱が永正18年(1521)に彩色を施した」と記されていることもその証左とされます。

初代国綱は、観応[北朝元号]元年(1350)柄杓山[城山]に山城を築き実城とし、山麓に居館をおき生活の場とします。また、桐生六郎の項でふれた梅原の地を下屋敷としていました。さらに多くの支城、物見山砦・丸山砦・元宿砦等を設け、丸山山麓から浅間山山麓まで続く要害堀(下瀬堀=後の新川)を掘り堅固な防備態勢を構築します。さらに周辺を攻略し、高津戸城(旧大間々町)を落とし現在の川内方面までを治めたと伝えられます。また、柄杓山城と梅原館を結ぶ線の間部辺りに西方寺を建立します。



柄杓山城址

西方寺に伝わる古記によれば、後桐生氏十代の系譜は次のようになっています。

- ①国綱—②元義—③豊綱—④義綱—
└ ⑤正綱
└ ⑥在俊—⑦親康—⑧重綱—⑨祐綱—⑩親綱

桐生氏が飛躍的に発展するのは八代重綱の時代です。武勇に優れ、黒川[渡良瀬川]山中の五蘭田城(旧勢多郡東村)を攻め落とし、小倉村(川内町)からは園田氏を追い、川内から黒川谷方面までを勢力範囲としました。しかし、荒戸が原で鷹狩り中に、愛馬「浄土黒」が卒倒したため落馬し負傷。手厚い手当の甲斐もなく亡くなってしまいます。その子九代大炊介祐綱(助綱或いは直綱とも)は「浄土黒」を卒倒死した場所に埋葬し、一本のアカメヤナギを植えます。これが現在の県指定天然記念物「伝承 桐生大炊の介手植えのヤナギ」(東七丁目)です。

祐綱はとても英邁で文武両道に優れ、戦国時代末期、諸将相争う中で勢力を拡大します。川内方面では赤荻城(仁田山城を主城とする)に有力な部下を配置して、柄杓山城の搦め手を固め、菱の細川内膳を滅ぼし、膳(旧粕川村)の膳因幡守を敗走させ直轄地としています。堅固な柄杓山城には、NHK大河ドラマ『麒麟がくる』(令和2・3)に登場した関白近衛前久親子が滞在したことがあったともいわれます。

祐綱には継嗣がなく、佐野昌綱の弟親綱(子



桐生氏累代の墓

重綱とも)を養子に迎えて家督を譲ります。ところが、親綱は桐生氏譜代の家臣を疎んじ、佐野から連れてきた随臣たちを重用したために家中に不和が起こり、加えて隋臣の間にも反目し合う関係が生じ、城内が三派に分かれてしまいます。さらに、新田用水に関わる水争いで前々から因縁のあった由良氏(太田金山城主)に奸計を仕掛けられ、桐生家中は一層乱れていきます。そこを一気に攻められ、元龜4年(1573)3月、堅牢を誇った柄杓山城が一日と持たずに陥落し、桐生氏は滅亡してしまいます。

以上は、前述した「桐生市史」や「桐生の歴史」の記載によります。「ふるさと桐生のあゆみ」も同様の内容です。しかし、これらの大半は、江戸時代に作られた軍記物等をもとに構成された歴史であり、明確な記録(遺物・文書などの一次資料)を基とした部分は僅かです。従って初代国綱の存在や行いも不明瞭であり、桐生城落城シーンも多分に時代小説風です。

しかし、現に柄杓山城址が存在し、梅原館には土塁が遺され、西方寺には累代の墓や佐野大炊助の銘文が伝えられています。ですから伝承だからといって、すべてが創作だとも言い切れません。現存する少ない史料からも南北朝から戦国時代にかけて、梅田周辺を根拠地に、戦乱の続く東国を駆け回っていた武家集団がいたことが明らかになっています。それが前桐生氏に連なる集団かどうかは分かりませんが、どこかの時点で佐野氏が支配するようになり、地名から桐生氏と呼ばれるようになったようです。

果たして真相はいかなるものだったのでしょうか。新たな文書の発見や考古学調査等、今後の研究による歴史の解明が待たれます。

☆参考『ふるさと桐生のあゆみ』『明日へ伝えたい桐生の人と心(上巻)』『桐生市史(上巻)(別巻)』『桐生の歴史-桐生文化史談会編』『群馬県史』『桐生佐野氏と戦国社会-桐生文化史談会編』『桐生市HP及びキッズページ』